

独法化対応を顧みて今後に期待すること

次 長 金谷紀行

4月から独立行政法人森林総合研究所がいよいよ新たなスタートを切る。長い時間をかけて検討してきたが、独法準備委員会の責任者として責任の重さを痛感するとともに、関係者のご理解とご協力を得て取り組めたことに感謝を申し上げたい。

独立行政法人という新たな組織の使命や目的を明確にするために、科学技術基本計画に謳われている21世紀初頭における我が国の課題と展望。「知の創造と活用により世界に貢献できる国」「安心・安全で快適な生活のできる国」「国際競争力があり持続的発展ができる国」といった目指すべき三つの姿や林政改革大綱を基に検討を重ねた。独法森林総合研究所の使命として「科学的知識の集積を図りつつ、人類共通の課題の解決、国民生活の安定に貢献する研究開発能力の向上、行政・社会二ーズに関連した分野横断的・総合的研究の推進」を掲げ、六つの重点的研究（森林の多様な機能の発揮、地球的規模での森林環境保全、持続的な森林管理・経営、循環型社会の形成への寄与、新産業創出、政策立案に資する研究）を推進していくこととした。こうした使命や目標を達成するために、いささか硬直化していたと思われる組織を見直し、任務を遂行するために機動的で柔軟に対応しうるような体制に組み替えるが、生かすも殺すも独法になってからの職員の意識の改革と努力が不可欠である。



検討に際して職員からの多くの意見を参考としたが、十分意を尽くすまでにはいかなかった面も否めない。不確定要素の多い中で検討が急がれたために、再度見直しを要する点も多いとは思ってはいる。しかし、まずはスタートしてみて、自律した魅力的な研究所を目指すよう努めていきたいと考えている。管理職には、今まで以上に経営の一翼を担っているという意識が必要であるのはもちろん、職員一人一人は使命の達成と経営をサポートする自覚が必要である。国の関与をできるだけ抑制し、独立行政法人の柔軟性・効率性・透明性・自律性等が求められている中では。言われたことを一生懸命やるような受動的な取り組みではなく、能動的でなければならない。研究を何のために行っているのか、その成果はどんな影響を与えるのかを考え、森林・林業・木材産業を何年後にはこう変えるといった目標設定を明確にした取り組みが必要だと考える。

ある有力企業の研究所長からうかがった話によると、研究者や技術者には、「夢と好奇心を持っていること、目標設定能力と学識や技能が高いこと、忍耐力があること、人との会話が必要なこと、柔軟性と広い視野を持ち、自分の考えを述べ決断すること、表現力と説得力があること、明るさとユーモアを持ち備えていること」を望んでいるそうである。自分を振り返ってみてこのような研究者であったかどうかいささか心許ないが、うかがったポイントの一つでも二つでもよくしたいと思っている。

独法 I 期目終了時には森林総合研究所はちょうど創立100年目を迎えることになる。いろいろ問題を抱えながらのスタートではあるが、楽しみながら使命・任務を果たしたいと考えている。

関係各位のご理解とご支援を一層お願いしたい。